



国内最古の道路可動橋 長浜大橋

Japan's oldest movable bridge, Nagahama-obashi Bridge

浅野泰弘

ASANO Yasuhiro

セントラルコンサルタント株式会社
技術本部 情報管理室



古希を迎えた動く橋

愛媛県松山駅から、JR予讃線で車窓に広がる真っ青な瀬戸内海伊予灘を眺めながら約1時間「伊予長浜駅」で降りる。長浜町商店街を抜けると、自然豊かな港町といささか不釣り合いに、朱塗の厳つい橋が姿を現す。一級河川「肱川」の河口に架かる現役で国内最古の道路可動橋「長浜大橋」である。

この橋、全長226m、幅員5.5m、7径間からなり、右岸から3径間目が開閉部分にあたる。開閉部分は、支間長15.6m、可動桁は長さ18m、重量82トン、中央のカウンターウェイトがおもりの役目をして開閉の作用を軽くする構造になっている。

開閉の際は、7.5馬力の電気モーター2基のうち、1基を使用するバスキュール式（跳開式）鉄鋼開閉橋である。

長浜町役場には、設計者「増田淳」のマイクロフィルムから起こされた図面が保存されている。増田淳はアメリ

カで30件の設計監督歴を持ち、日本では徳島県三好橋、吉野川橋などを手がけた逸材であり、70年前に英文で書かれた図面の緻密さと美しさには驚嘆させられた。

住民の積年の悲願

「オーエンボウチヨウニコイ」

昭和6年春の愛媛県議会にて、長浜大橋新設の議案上程当日に、時の町長、西村平太郎から、門田豊市助役へ打電された一文である。

門田豊市助役と長浜町議らは議場に駆けつけ、傍聴席から応援、激しい討論の末、可決されたという。

当時、西方の三崎半島に至る海岸沿いの集落との交易は海上交通に依存し、時化になるとこれらの集落は陸の孤島と化していた。

また、海難事故も多く、明治30年4月16日には長浜での1日興業の為に悪天候を押して出航した京都女歌舞伎



■写真1 [前頁] 一秋から冬にかけての早朝、霧を伴った冷気風「肱川あらし」が橋を吹き抜けることがあり、赤と白の絶景として知られている（長浜町提供）
■写真2 [左上] 一架橋当時の開閉テストと思われる写真。垂直まで橋を上げることは通常は無い（長浜町提供）



■写真3 [右上] 一開閉は非常にスムーズ。悠然と動く橋につい見入ってしまう
■写真4 [左下] 一長浜と沖浦を結ぶ生活道路として親しまれている。平坦なこともあり利用者は非常に多い
■写真5 [右下] 一空と川の青に映える朱塗の鉄鋼橋。第二次大戦中には米軍機の機銃掃射を受けその痕が今も残る

一座23人を乗せた船2隻が暴風雨により転覆するという痛ましい事故も起きている。

陸路の開通は、住民の積年の悲願であり、昭和7年に着工し昭和10年8月、当時の工業の粋を集めた可動橋が見事に開通した時には、全町挙げての祝賀会が三日間続いたという。

動き続けた橋

「森の音楽家」のメロディーと共に、実にスムーズに橋が開く。

開閉に要する時間は概ね3分、今では、週に一度日曜日の午後1時に点検と観光の為に開閉されるのみであるが、架橋当時は、肱川流域から産出される砂利、木材の運搬船が日に何隻も行き交っていた。

「オヤジ、いつまで涼ませておくつもりかい。早く橋をおろさんかい」橋の上から罵声が飛ぶ。橋を降ろせば、汽笛がブーブーと鳴り続ける。開通以来、昭和29年末までの18年余の間の開閉回数は62,433回、通過船舶は87,230隻に及んだ。

そんな忙しかった橋も、昭和40年代には開閉されることは日に1度あるかないかになり、橋はほとんど陸上交通だけに利用されるようになっていった。

愛される赤橋

昭和52年に新長浜大橋が架橋され、長浜大橋が撤去されそうになった時、地元では保存運動が起きた。町から県へは昭和50年、52年と2度に渡って陳情書が提出され、その中には、「この橋は、昭和十年來、沖浦観音、水族館と共に三大名物として町民よう親しまれ、長く遺したい文化遺産であります。（略）存続、将来可能な限りの維持管理を続行して頂くよう強く要望するものであります。」と記されている。

長浜大橋の学術的価値が一般に認められたのは、平成6年11月同町で開催された「動く橋サミット」、そして平成10年9月に登録文化財になって以降であるが、それまで橋を守ったのは地元住民の橋への愛情に他ならない。

現在の長浜大橋は、地元の生活道路として利用され、車、自転車、歩行者が行き交い、すれ違う歩行者と自転車は橋の上で足を止め、談笑する。朱塗の橋の上での日常、地元の人はこの橋を愛着を込めて、「赤橋」と呼ぶ。のどかな町と不釣り合いに見えた橋は、帰路につく頃には、そこにあってしかるべき当たり前前の光景に思えた。

（資料提供：長浜町役場 <http://www.town.nagahama.ehime.jp/>）

〈参考資料〉
1) 土木学会誌 1998年2月号「長浜大橋（赤橋）と肱川あらし」／丸山壽一、洲尾計邦著
2) 「長浜町誌」／長浜町
3) 「長浜大橋パンフレット」／長浜町
4) 昭和44年4月26日夕刊「開閉橋を守る」／愛媛新聞
5) 文化愛媛2004年52号「南伊予の民話紀行」／愛媛文化振興財団